



インパクトのある著者名に魅かれて、夫の書棚から一冊選び、バッグに入れて、電車に乗りました。それは石牟礼道子氏（1927-2018）と、彼女を敬愛する草木染の染織家・志村ふくみ氏（1924-）が、相互に文通、対談を求められ、それを記録し、出版した《遺言》です。

石牟礼氏は50年前の1968年に《苦海浄土》を発表され、「わが水俣病」という副題でわかるように、水俣病で苦しむ故郷の人々を、故郷の言葉で、ご自分のことのようにつづられた作家です。今年2月に90歳の生涯を終えられました。この本によって、水俣病は「公害病」として周知されましたが、私は水俣病は企業犯罪であるとしか思えないのです。この著書は「告発」である以上に、無名の、無辜の、生贄となった人々の魂の声として、響いてくるのを感じずにはいられません。素晴らしいオーラルヒストリーとなっていると思います。

文通、対談がなされた当時、お二人とも80歳代で、「一日一日が最後のよう日々」という強い思いを込めて、《遺言》というタイトルにされたのでしょうか。この文通、対談の根底には、水俣病、そして、「フクシマ」があるから、余計に、今を危機的、終末的に捉えざるを得なかったようです。

 石牟礼氏は、天草四郎についての新作能「沖島」の装束について構想中に、志村氏の「みはなだ色」（左）の絹糸の束を見て靈感のようなものを感じて、天草四郎の装束にと、制作を依頼しました。通常、水縹（みはなだ）色とは、藍染の薄い明るい青色のことですが、志村氏は「臭木の実」（右）からその色を取り出しました。志村氏は「得も言われぬ天上の色」と言われます。石牟礼氏の靈感と、志村氏の自然に感応し、呼応する感性が鋭く識別した色が、天草四郎を表現することになりました。



 天草四郎の道行を先導する竜神の娘あやの衣装に、石牟礼氏は緋色を想定し、あやに霊界の明るさを象徴させたいと願います。それに応えて、志村氏は紅花（右）から得る紅色（左）が相応しいと言います。草木染は葉、実、茎、根等から染料を取り出しますが、唯一紅花だけが花が染料となるのだそうです。この紅を石牟礼氏は「幼くて、可憐な」と、志村氏は「茜でも蘇芳でも染められないすごい赤」とその美しさに魅了されています。



能衣装から始まり、相互の作品への思い、色のイメージ、染色、手仕事、美など、対談の過程で、縦横無心に話が広がっていきます。志村氏の自然に感応し、自然と呼応しながら働く生き方、石牟礼氏の故郷の山、海と共に生き、小さな生き物の命にさえ、感嘆する思いが相互の魂に触れあっていく様子が対談や、手紙から伝わってきます。

島原の乱で、天草四郎は百姓一揆を指導した若者でしたが、幕府は経済面の失政を受けず、キリシタン禁制を盾に、見せしめのような形で大虐殺を行ったため、貧民と共に生きた人、キリスト者として二重に悲劇の生贄になりました。雨ごいのために人柱とされた少女あやが四郎と共に海に沈んでいくというのが能の結末ですが、石牟礼氏はみはなだ色と紅色の衣装を着け入水する四郎とあやを、「死ぬんじゃないですよ。『沖宮』というのは命の生まれるところ」、「妣たちの祖がいるところ」、「生き返るための道行きなんです」、「生き返るときの色」と展開させます。志村氏は「わかった。よみがえりの色だったのね」と応えます。無辜で、犠牲となって死んだ者の命について、石牟礼氏は耐え難い惜別の思いを持っています。「なんとしても生き返って」という思いが能装束の色に投影されているのです。お二人が自然の営みや、どんなに小さい命にも敬意をもって共に生きようとするのを《遺言》に記しておきたかったのだと感じました。